

高×大専社 接続の視点で考える

社会の変化に対応する人材の育成に向けて、大学や専門学校では新たな教育プログラムや入試改革が進んでいる。本コーナーでは、今後の教育において重要なキーワードについて、高校と大学・専門学校・社会の接続の視点で考えていく。

キーワード

非認知能力

社会が求め、大学が重視する「非認知能力」

ベネッセーキャリアが実施した「企業の『新卒採用動向』における調査2025」と「大学キャリアセンターの学生キャリア支援における調査2024」によると、採用にあたって企業が評価する力（前者の調査が対象）と、大学が評価してほしいと考えている力（後者の調査が対象）は、いずれも1位が「人柄・性格」、2位が「自社（志望企業）への熱意」、3位が「汎用的スキル」と、上位3つが一致した（図1）。1位の「人柄・性格」は、主体性やコミュニケーション力、レジリエンス（回復力）など、職場の多様な人々と協働し、困難を乗り越えて成果を出す上で重要となる非認知能力に密接にかかわっていると考えられる。

非認知能力は、他者とのかわりや様々な経験、その振り返りなどを通して

育まれる側面が大きい。そうした力を育む機会の1つとして近年、各大学が力を入れているのが、企業と連携して課題解決や製品開発などに取り組む「課題解決型学習（PBL（*1））」だ。文部科学省の「令和5年度の大学における教育内容等の改革状況について」によると、教育課程内でPBLを実施する大学は約45%に上る。多様な他者とかかわりながら試行錯誤を重ね、答えが1つではない問いに挑むPBLの実施は、学生の主体性と協働性などを育むとともに、大学が社会との接続を重視していることの表れとも言える。

認知能力と非認知能力は独立したものであるのではなく、相互に影響し合う関係にあると考えられている。例えば、課題に粘り強く取り組む忍耐力や「できるようになりたい」という意欲、計画に基づいて

集中して取り組む自己コントロール力といった非認知能力は、学習を継続させ、認知能力を高めていく上での支えとなる。一方、学習を通して「分かった」「できた」という実感を得たり、自ら考えて問題を解決したりする経験が、自己肯定感や主体性などの非認知能力を育むこともある。そのように、認知能力と非認知能力は、学びの中で相互に作用しながら育まれていくものと捉えることができる。

非認知能力の重要性と、非認知能力と認知能力の相互に影響し合う関係を踏まえれば、両者を一体的に育む教育は、大学だけではなく、中学校や高校、専門学校など、様々な教育段階で今後一層重要になるのではないだろうか。次ページからは、非認知能力と認知能力を密接に関連しているものと捉え、両者を中学校や高校の段階から中長期的な視点で育成している先進事例を紹介する。

図1 企業における「選考基準」と大学の「学生を評価してほしい観点」

企業			大学		
#	項目	割合	#	項目	割合
1	人柄や性格	59.5%	1	人柄や性格	92.8%
2	自社への熱意	43.5%	2	志望企業への熱意	70.0%
3	汎用的スキル (思考力、問題解決力等)	42.6%	3	汎用的スキル(思考力等の 問題を解決する力)	66.4%
4	採用ポジションへの適性	40.3%	4	正課外の経験	43.3%
5	専門的スキル	32.3%	5	スキル、資格以外の大学・ 大学院で身につけた専門性	39.7%

※出典 ベネッセーキャリア「大学キャリアセンターの「学生キャリア支援」における調査 2024」

*1 Problem Based LearningあるいはProject Based Learningの略。



学校事例

育成を目指す「未来学力」を定義し、 教育活動の改善と成果検証に取り組む

宮城県・私立東北学院中学校・高校

非認知能力を育成する 学校の新しいあり方を追求

創立140年の伝統を誇る宮城県・私立東北学院中学校・高校は2022年度、教育内容を大きく見直す学校改革に着手した。「多様な人々との協働が一層求められる社会になっていくことを見据え、本校でどのような教育を行うべきか、全教職員で話し合いを重ねた」と、当時の様子を帆足直治校長は振り返る。

「話し合いの結果、中学校、高校はもちろん、大学や社会でも学び続けられる人になるには、これまでの学校教育で重視してきた学力だけを追求するのではなく、中学・高校の段階で多様な人々と協働し、自ら問いを立ててその解決を目指す、新たな価値を生み出す力を身につけることも必要だ」という共通理解が生まれました」

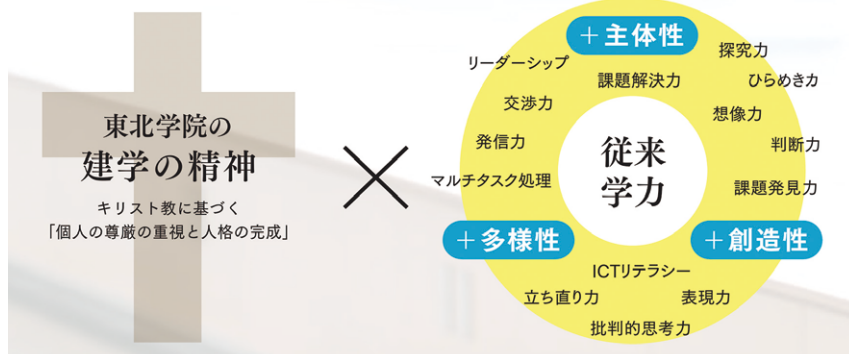
同校の教職員たちは、これまで重視してきた学力である認知能力と、他者と協働したり、自ら問いを立てたりする力、

いわゆる非認知能力は、相互に高め合うものであり、生徒にとって車の両輪のような不可分なものと捉えた。そして認知能力と非認知能力を中高6年間でどのように育成していくのか、議論を続けた。

「未来学力（*2）はどのような力で構成され、日々の授業や特別活動などどのように育成されるのか、そして授業や学校行事をどのように改善すれば、それらの力の育成が促進されるのかについて話し合いました」（高橋裕一教頭）

議論を経て、未来学力は「多様性」を尊重する姿勢、「主体性」、「創造性」で構成される資質・能力であると定義され、その育成が図られることになった（図2）。以来、教師がチームで取り組む「教わる授業」から「学ぶ授業」への授業改善、生徒による意思決定を尊重する部活動改革、生徒主体の学校行事の運営など、未来学力の育成に向けた施策を打ち出してきた。未来学力の育成の場として中でも重視しているのが、大学と連携した探究学習だ。

図2 認知能力と非認知能力をともに高めて育む「未来学力」



※学校資料をそのまま掲載。

同校の総合的な探究（学習）の時間では、持続可能な開発のための教育ESDである「3し希望学」を中高6年間で展開しているが、26年度からはデータサイエンスの活用を重視し、東北学院大学から約40人の教員を生徒の相談役として迎え、中高大連携の探究学習を行うよう、再整備を進めている。また、23年度か

学校概要

設立 1886（明治19）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数（全日制） 中学校約180人・高校約360人（いずれも1学年）
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、宮城教育大、山形大、福島大、埼玉大、東京科学大、宮城大などに78人が合格。私立大は、上智大、慶應義塾大、中央大、東京理科大、法政大、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ427人が合格。



教育研究部長
武田 誠
たけだ・まこと
同校に赴任して6年目。英語科。



進路部長
小黒智之
おぐろ・ともゆき
同校に赴任して29年目。英語科。



教頭
高橋裕一
たかはし・ゆういち
同校に赴任して32年目。



校長
帆足直治
ほすくし・なおじ
同校に赴任して38年目。

*2 東北学院中学校・高校が定義する、「多様性」「主体性」「創造性」の3要素で構成され、認知能力と非認知能力をともに高めて育む資質・能力のこと。

図3 「GPS-Academic」による「未来学力」の可視化

	多様性	主体性	創造性
批判的思考力			
協働的思考力	○		
創造的思考力			◎
感情の制御	○		
立ち直りの早さ		○	
状況に応じ冷静に対応する		○	
自ら先頭に立って進める		◎	
未知のものに挑戦する			○
粘り強くやり抜く			○
相手の立場に立とうとする	◎		
他者と関わろうとする積極性	○		
多様性を受容する経験	◎		
関係性を築く経験			
議論する経験			
課題を設定する経験		○	◎
解決策を立案する経験			○
実行・検証する経験		◎	

※学校資料を基に編集部で作成。

育成を目指す資質・能力を アセスメントで可視化

な人たちとの協働を通じて、創造性や思考力を高めていく。

「3」希望学、アントレプレナーシップ入門塾のいずれにも、教室では体験できない学びが多くあります。多様な人たちとかわりながら生徒たちが未来学力を身につけていることがよく分かります」（教育研究部長・武田誠先生）

大学や実社会と連携した学びの質を高めるために、同校では探究学習に関連するフィールドワーク、企業訪問、地域の行事への参加を今まで以上に推進する予定だ。

して定義し、その育成のための教育活動の充実を図ってきた同校は、その成果を検証するために、「GPS-Academic（＊3）」を中学・高校の全学年で導入した。

「未来学力の育成の視点で生徒を見た時、確かに成長しているという手応えを感じていましたが、それを数値化できれば、教師も生徒も学校が育成を目指す資質・能力をより認識しやすくなり、それぞれの意識や行動の改善につながれると考え、「GPS-Academic」を導入しました」（帆定校長）

生徒が未来学力を高めていくためには、教師から与えられたタスクをこなすような学びではなく、生徒が自分にはどのような非認知能力が不足しているのかを自覚し、主体的に行動していくことが不可欠だと帆定校長は考える。

「私たち教師が生徒の未来学力を育成するためには、本校の生徒がどのような非認知能力が高く、どのような非認知能力に伸びしろがあるのかを把握し、自分の担当する授業や活動を具体的に改善していく必要があります。生徒、教師双方にとって、非認知能力の育成状況の可視化の意義は大きいと考えました」（帆定校長）

26年7月には「GPS-Academic」の受験結果を基にした研修会を開催。全教師が参加し、「GPS-Academic」で測定する17の指標を、未来学力を構成する「多様性」を尊重する姿勢「主体性」「創造性」に紐づけ（図3）、学年・コースごとに生徒の特徴を分析した。教師からは、「未来学力は中長期的に育むものであることが分かった」「周囲の意見に耳を傾けながら自分の考えを深める時間を、授業において継続的に確保していきたい」といった声が上がった。

「生徒の希望進路の実現のために、今後『GPS-Academic』の結果を踏まえた面談にも力を入れていきます。教師が『GPS-Academic』で生徒を多角的に見取り、未来学力の向上が確かめられれば、成績が伸び悩んでいる生徒であっても、その生徒の学びの意欲を高めることができるようになりました」（進路部長・小黒智之先生）

未来学力を育むための教育環境を充実すべく、高大連携も進めていく考えだ。既に「GPS-Academic」を導入している東北学院大学と連携し、中学・高校から大学までの生徒の非認知能力の変化を継続して把握し、それを大学での学修計画などに生かす取り組みが進められている。さらに25年度には、東北学院大学と東北学院高校、東北学院^が榴ヶ岡高校が連携した「中高大一貫教育事業」の一環として、「GPS-Academic」を活用し、生徒一人ひとりが自分の強みを将来の学びや進路にどう生かすかを考えるワークショップを開催。東北学院大学の教員がファシリテーターとなつて、高校生に大学進学から大学卒業後までを見据えた長期的な成長イメージを描かせる機会も設けた。

「卒業生に対して、本校で身につけた資質・能力のうち、大学や社会で特に役立つ資質・能力や周囲の人よりも秀でていると思える資質・能力などについて尋ねる追跡調査を実施することも考えています。卒業生からも本校の教育に対する振り返りを得ながら、中学校や高校だけでなく、大学や社会でも必要となる非認知能力の育成についての理解を深め、中・高・大を接続した非認知能力の育成のロードマップの土台を構築したいと考えています」（帆定校長）

＊3 ベネッセが提供する、「思考力」「姿勢・態度」「経験」の3つの観点から、問題発見・解決する力を測定し、生徒一人ひとりの「強み」を明らかにするアセスメント。

中長期的な視点で 認知能力と非認知能力を相互に高める

学校事例としてご紹介した東北学院中学校・高校は、2022年度に行った学校改革の中で、育成を目指す資質・能力を「未来学力」と定義し、従来から重視していた学力である認知能力に加え、非認知能力を中高6年間で育成する方針を掲げました。そこで注目すべきは、非認知能力は認知能力に取って代わるものではなく、両者が相互に作用しながら育まれるという点です。

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査 2023-2025」によると、高校生のいずれの学年においても、非認知能力である「粘り強さ」「挑戦心」の高い生徒ほど、認知能力が比較的問われるテストの成績が高くなる結果が見られました。(図1)

現在、審議まとめの段階にある次期学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じて、自らの人生を舵取りする力と、民主的で持続可能な社会の創り手を育成するために、『好き』(興味・関心)を育み、『得意』を伸ばすことと「当事者意識を持って、自分の意見を形成し、対話と合意ができる」ことが有機的にかか

(株)ベネッセコーポレーション
学校カンパニー 教育情報センター長
渡辺健太 わたなべ・けんた



わり合い、両輪として高まっていく教育課程の実現を目指すことになる見通しです。そこでポイントとなるのは、探究の原動力となる「好き」や「当事者意識」と、それを深い思考や表現へとつなげる「得意」や「知識・技能」が別個のものではなく、相互に支え合う関係にある点です。そのように、認知能力と非認知能力を相互に関連づけながら育んでいく視点が、今後の高×大・専・社接続の核となるのではないのでしょうか。

また、年内入試による大学入学者が増加する中、私は2つの空白期間に注目しています。

1つめは、年内入試合格後から高校卒業までの期間です。その期間に大学側が合格者に対して事前課題を出したり、学習ツールを提供したりする「入学前教育」は一般的になりました。大学入学前に進路決定者が主体的な課題学習や準備に取り組むことは、進路決定後の学習意欲や自己調整力(非認知能力)の低下を防ぎ、大学での学びにスムーズに入っていくために必要な知識・思考力(認知能力)を定着・維持させることにつながります。

2つめは、高校時代に高まった探究に対する意欲が教養科目中心の大学1年次の学びの中で分断されがちな「探究の空白期間」です。近年増えつつある高校在学中に参加できる大学の探究プログラム(名古屋大学理学部・総合型選抜、九州大学・総合型選抜「次世代研究者発掘入試」など)や早期探究型の入試制度は、高校で培った挑戦心や当事者意識を途切れさせず、大学での高度な専門知識の獲得へと引き上げる役割を果たします。そのように、2つの空白期間を「認知能力と非認知能力の相互作用を持続させる期間」と捉え直すことで、校種間連携の新たな可能性が開かれるのではないのでしょうか。

以上のような点からも「高×大・専・社接続」の重要性は今後ますます高まっていくと考えられます。次号の本コーナーもぜひご期待ください。

図1 高校生における非認知能力と認知力の関係



いずれの学年でも、非認知能力である「粘り強さ」「挑戦心」の高い生徒ほど、成績が高くなる結果が見られた。

※「粘り強さ」は「一度決めたことは最後までやり遂げる姿勢」、「挑戦心」は「難しいことや新しいことにいつも挑戦したい姿勢」を示す。
※数値は相関係数。いずれも統計的に有意であった。

*出典 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査 2023-2025」

Web VIEWnext ONLINE
関連記事は**こちら!**

今回のテーマに関する過去の記事は、教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』でご覧ください。
2024年8月号「見えない力」を言語化すると、生徒の意識や行動が変わる
▶ <https://benesse-hs.jp/sv2dc>

